

「共創学」発刊を祝して

三輪 敬之*

共創学会会長

Celebrating the Publication of “Cocreationology”

Yoshiyuki Miwa*

President of Society for Cocreationology

* Corresponding Author: miwa@waseda.jp

令和元年という節目に、オンラインジャーナル『共創学 (cocreationology)』が発刊されますことを大変嬉しく思います。本誌が、皆さまの知をゆさぶり、感性を触発し、共創する社会に向けてどう生きていけばよいのかを自身に問いかける足場となることを期待しています。

さて、共創学会は、2017年3月に設立記念大会を開催し、その翌月の4月に発足しました。当時は、「共創学会とは何をするところなのか」、「どんな人たちに集まってほしいのか」といった問いをよく耳にしました。その時、発足メンバの一人が口にした言葉が、「“共創っぼい人”が集まるといいなあ」でした。「共創っぼい人って?」と尋ねると、「う～ん。ぼい人」と返ってくるだけでしたが、そこには何かしら相通じるものがありました。それは、少なくとも、巷で言われているようなコラボレーションまがいの共創を指していないことは確かでした。また、システム化（人工知能化）する人間の思考や社会の在り方に違和感を抱く人たちであることも、容易にイメージされました。一方で、はっきりと線引きしないところに“共創っぼい”を求め続けていきたいとする暗黙の了解もあったように思います。

この“共創っぼい”は、創刊号のテーマとも密接に関係にしています。2017年度の後半から『共創学』の発刊に向けた準備が始まり、「共創とは何か」について理事会メンバを中心に勉強会を重ねました。それぞれが自身の考えを原稿にまとめて持ち寄り、思い思いに語ったのですが、そもそも共創を定義できていないわけですから、奔放に進む対話の向こう側から何かやってくるのをみんな待たせ、そういった雰囲気なかで議論は進みました。そんななか、第1回年次大会「スキマをつくる、スキマに入る」の企画や年3回の共創学研究会において、「共創は窺い知れない他者（外部）と徹底してつきあい続けることだ」と主張し続けた郡

司さん（当時、副会長）の言葉は、まさに“共創っぼい”を直観させるものでした。つまり、スキマに生きることが共創を呼び寄せるのであり、だからこそ共創とは、目標を立てその達成をめざす合理的な手段系列にあるのではなく、外部を呼び込む実践的プロセスそのものを指し示すということなのです。加えて、第2回年次大会テーマの「身震い」には、内と外の区別を無効にすることを促す技・術としての“表現”を、大きく掲げたいという狙いがあったように思います。こうしてみると当初の“共創っぼい”という言い回しは、実は共創それ自体を端的に言い表していたと、今では思えるようになりました。

今回集まった論文には、多かれ少なかれ、“共創っぼい”が反映されています。外部とつきあい続けるためには、“おのずから”と“みずから”を共立させるような技・術が必要になります。こう言うのは簡単ですが、それはマニュアル化して具体的に示せるようなものではありません。両者を俯瞰する第3者の視点を導入することは決して許されないからです。つまり、“わたし”を抜きにして共創を語ることはできないのです。最近、哲学の分野では、知覚されない外部の實在に目を向ける思弁的實在論が話題になっていますが、他者（外部）と共に創ること（＝共創）にまでは踏み込めてはいません。また、障害の有無や年齢、性別に関係なく、違いは違いのままに包み込むインクルーシブな社会が注目されていますが、ここでも他者（外部）と共に創ることは十分に考えられていないと思います。

幸いなことに、共創学会には多様で異質な人々が集まっています。この3月に行った第6回共創学研究会では、所属する大学はもちろんのこと、保育、芸術、認知科学、音楽療法といったように、分野をも異にする4名の若い研究者と実践者が、「共創なんていわない」と

いう刺激的なテーマでの話題提供を行いました。この学会で出会った彼らが、自主的に集まり、議論しあったなかで生まれた、自身への、そして未来への問いかけでした。そこには、共通の場やコンテキストを追い求めるのではなく、いずれもが自分になって表現し、それぞれの可能性を他者と共に創り上げていこうとする意志とその困難さがみとれます。共創は周りの人を同一化して、安易な“わたしたち”を創り出すことではありません。異質な人々の集まりが、あちらこちらで、つながったり切れたりしながら形を変えていくこともまた、“共創っばい”といえるのではないのでしょうか。

会員の皆様には、是非、すべての論文に目を通して

いただき、活発な議論を展開していただきたく思います。第3回年次大会「共創のからくり」(九州大学)では、創刊号を記念した企画も予定されています。共創には困難さのなかに新たな希望を立ち上げる潜在的な力があると、私には予感されます。そのためにも共創学会そのものがスキマであってほしい。このスキマを皆さんと一緒に掘り、耕していくこと、それは始まったばかりですが、そこにこそ他にはない共創学会の存在意義があると思います。

最後に、創刊号の発刊に向けて、ご尽力いただいた編集委員長の郡司幸夫氏、幹事の三輪洋靖氏をはじめ編集委員の皆様へ深く感謝申し上げます。